

八戸市およびその隣接地域に建てられた 消防屯所の建築

平 井 聖

Fire Stations for Local Squads Built in Hatinohe and its Vicinity

HIRAI-Kiyosi

目 次

1. はじめに
2. 八戸の消防組織（歴史的に）
3. 八戸の消防屯所の建築
4. 屯所建築の様式的分類と特色
5. 屯所建築の近代化遺産としての意義

1. はじめに

数年前までに、盛岡に行ったことがある人なら、八幡町の番屋の屋根の上に立っていた、火の見櫓を覚えている人が多いのではないかと思います。番屋が老朽化したためか、市の広報紙によると、現在は新しい「八幡地区コミュニティ消防センター」の屋根の上に、火の見櫓だけが、移築、復元されているようです。

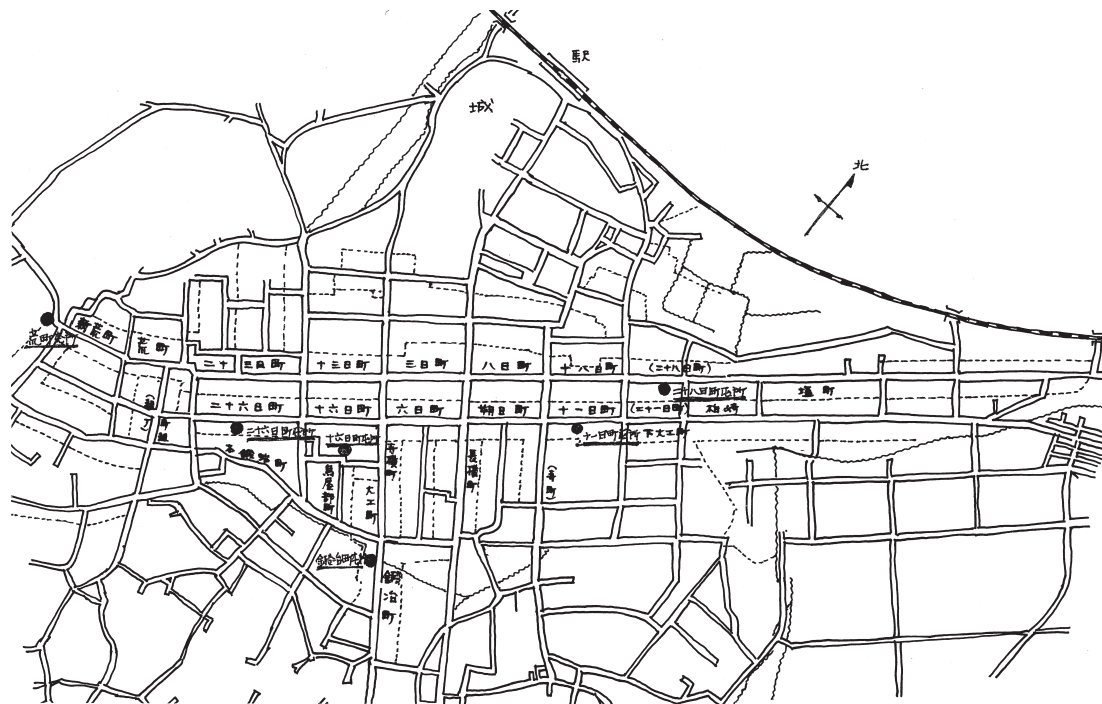
盛岡の懐かしさを誘っていた八幡町番屋の火の見櫓以上に、街の風物詩となっていたのが、八戸の町の消防屯所であり、その火の見櫓だと思い、20年前の1991年に、卒業論文のテーマに取り上げ、学生森田実保子さんと当時岩手県の一関市に住んでいた卒業生の浅井富枝さんと一緒に調査して回りました。この報告は、主としてその折のメモ・写真・スケッチと、森田実保子さんの卒業論文^(註1)、および『八戸市消防団史』^(註2)をもとにしています。

報告することにした動機には、3月11日の東日本大震災があります。その被害を受けたもの、それ以前にすでに取り壊されたものが多いと考えられ、中には二十六日町の屯所のような、個人的ですが、保存を希望するキャンペーンがインターネット上に見られるケースもあります^(註3)。そこで、20年も前のことになりますが、調査当時の状況を報告して、八戸とその近郊に残っていた貴重な近代化遺産の評価を促すとともに、八戸にこのような現象が起こった原因について小考を試みました。

2. 八戸の消防組織（歴史的に）

八戸市の消防組織は、昭和46年（1971）に設けられた「八戸地域広域市町村圏事務組合」の消防本部のもとに江戸時代以来の消防組が組織化され、八戸地区、三戸地区、五戸地区の3地区、計11消防団に編成されて現在に至っています。

藩政時代の消防体制は、寛文4年（1664）開藩の翌年の寛文5年（1665）に定められた、武家の火



八戸中心部の町割り

周りの制度から始まりました。宝暦頃に町の火消が確立したようで、宝暦7年(1757)年には町人火消の数が210人であったとの記録があります。また、江戸時代の文書に、三日町、六日町、十三日町、十八日町、廿三日町、廿八日町、惣門丁(新荒町)の組織名が見られ、八戸の城下町の東西に延びる2本の通りに面する町ごとに組織が結成されていたことが窺えます。

維新後は、い(六日町、十六日町)、ろ(三日町)、は(鍛冶町)、に(朔日町)の4組、明治5年(1872)には、仁、義、礼、智、信の5組、その後も組の数が増えるとともに組名も変わり、昭和5年(1930)に改編された、第1部1号(新荒町)、2号(二十六日町)、3号(糠塚)、第2部1号(十六日町)、2号(鍛冶町)、3号(吹上)、第3部1号(十一日町)、2号(二十八日町)、3号(塩町)、第4部(市役所)、第5部1号(佐比代)、2号(新堀)、第6部1号(湊)、2号(大沢)、第7部(白銀)、第8部(鮫)、第9部(南浜)の9部17組が、現在も基本となっています。

この時の八戸消防組の組織は、組頭1、副組頭2、部長9、小頭33、消防504名の、総数549人でした。

消火器具は、江戸時代からの竜吐水にはじまり、明治12年(1879)に腕用ポンプ、同24年(1891)に大型腕用ポンプ、明治44年(1911)に蒸気ポンプ、大正15年(1926)に手輓ガソリンポンプと変化し、昭和6年(1931)に初めて自動車ポンプ(消防自動車)が導入されています。消防自動車の導入は、消防器具を収める屯所の建物の入口装置などに、影響を与えています。

3. 八戸の消防屯所の建築

屯所は消防器具の置き場であるとともに、消防団員の詰所、集会場所でした。特に、八戸の有名な祭礼「三社大祭」に際して、町ごとに毎年異なった趣向で出す山車の制作作業所にもなりましたので、2階を広い1室とする事が要求されました。

次に、『八戸市消防団史』巻末の年表から、管内における屯所の新築記事を取り出し、年代順に列記した上で、実地調査或は写真によって外観が判明している消防組の屯所の建築については、その名称、竣工等の時期、建設関係者名を太字で示し、外観の写真あるいはスケッチを掲げました。

新荒町屯所

明治 36 年 (1903) 竣工

十一日町機械置場

明治 41 年 (1908) 5 月 22 日 竣工

糠塚屯所

明治 41 年 (1908) 10 月 4 日 竣工

二十八日町屯所

明治 42 年 (1909) 5 月 竣工

棟梁 後村三郎 (悪虫村)

大正 13 年 (1924) 5 月 16 日 大火で焼失

十六日町屯所

明治 42 年 (1909) 7 月 27 日 竣工

大正 11 年 (1922) 5 月 6 日 大修理

大正 13 年 (1924) 5 月 16 日 大火で焼失

鍛冶町屯所

明治 43 年 (1910) 5 月 竣工

棟梁 青木元次郎

昭和 32 年 (1957) 望楼撤去

湊消防組屯所

明治 43 年 (1910) 11 月 竣工

塩町屯所

明治 44 年 (1911) 5 月 14 日 竣工

大正 13 年 (1924) 5 月 16 日 大火で焼失

大館村消防組屯所

大正元年 (1912) 12 月 15 日 竣工

小中野村左比代屯所

大正 5 年 (1916) 5 月 竣工

朔日町屯所

大正 7 年 (1918) 6 月 27 日 竣工

(大正 9 年頃より第 2 部 3 号は朔日町が解散し朔日町から吹上に変わる)

二十六日町屯所

大正 7 年 (1918) 12 月 5 日 竣工

棟梁 野田与助 (8 角の火の見櫓)

大正 13 年 (1924) 5 月 16 日 大火で焼失

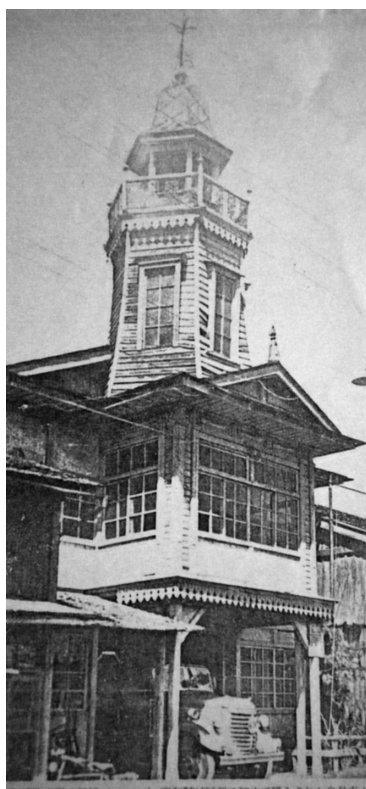
*:『八戸市消防団史』より

▲:調査時に蒐集した写真
無印は著者が原版を所蔵しているもの

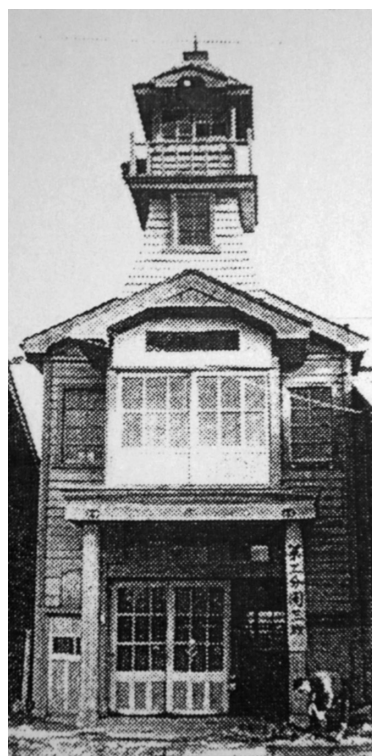
▲印については、所蔵者をご存知の方はご教示下さい。



二十八日町屯所▲



鍛冶町屯所▲



塩町屯所 (大正 13 年の大火後か)*

吹上屯所

大正 9 年 (1920) 5 月 11 日 竣工

荒町屯所

大正 9 年 (1920) 10 月 6 日 竣工

棟梁 後村三郎 (悪虫村)

昭和 57 年 (1982) 3 月 17 日 解体
24 日完了

小中野村新堀

大正 9 年 (1920) 10 月 24 日 ポン
プ置場 竣工

新組ポンプ置場 (新組屯所)

大正 10 年 (1921) 1 月 26 日 竣工

棟梁 後村三郎

小中野村消防屯所

大正 10 年 (1921) 2 月 24 日 寄付
される

売市村消防組合屯所

大正 11 年 (1922) 3 月 25 日 竣工

沼館村火防組合機械器具置場

大正 11 年 (1922) 6 月 7 日 竣工

大館村妙火災予防組合ポンプ置場

大正 11 年 (1922) 9 月 竣工

永福町屯所

大正 12 年 (1923) 3 月 17 日 竣工

棟梁 白石寒能象 (豊崎村)

大館村寺分火災予防衛生組合屯所

大正 12 年 (1923) 7 月 15 日 竣工

櫛引屯所

大正 12 年 (1923) 7 月 15 日 竣工

市川村消防組屯所

大正 12 年 (1923) 8 月 2 日 竣工

鮫村消防組第 2 部 (白浜) 屯所

大正 13 年 (1924) 3 月 竣工

湊消防組第 3 部 (大沢) 屯所

大正 13 年 (1924) 8 月 竣工

下長苗代村消防組第 1 部 2 号 (悪虫)
屯所

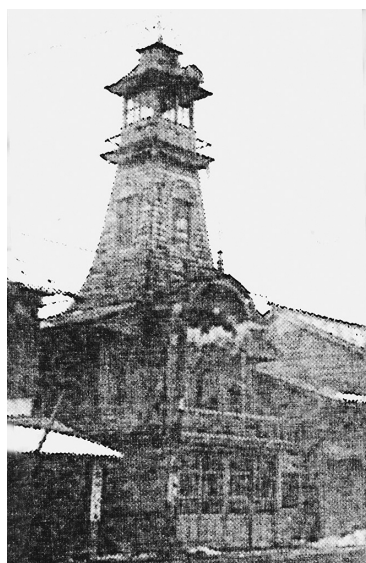
大正 14 年 (1925) 3 月 31 日 竣工

小中野消防組第 2 部 (新堀)

昭和 2 年 (1927) 10 月 竣工

湊村消防組第 3 部 (大沢) 屯所

昭和 3 年 (1928) 11 月 竣工



吹上屯所*



荒町屯所



新組屯所^



永福町屯所*



新組屯所



永福町屯所

二十六日町屯所

昭和5年(1930) 竣工

棟梁 峠館由太郎

梨の木平火防組屯所

昭和6年(1931) 4月10日 竣工

石手洗火防組屯所

昭和6年(1931) 4月20日 竣工

糠塚屯所

昭和7年(1932) 5月26日 竣工

鮫屯所

昭和8年(1933) 9月 竣工

左比代屯所

昭和8年(1933) 10月25日 鉄骨

70尺望楼新設

昭和17年(1942) 10月 戦争のため

に望楼の鉄強制献納

新堀屯所

昭和8年(1933) 10月25日 鉄骨

70尺望楼新設

昭和17年(1942) 10月 戦争のため

に望楼の鉄強制献納

十一日町屯所

昭和9年(1934) 6月 竣工

二十八日町屯所

昭和9年(1934) 6月 竣工

十六日町屯所

昭和10年(1935) 6月 竣工

白銀屯所

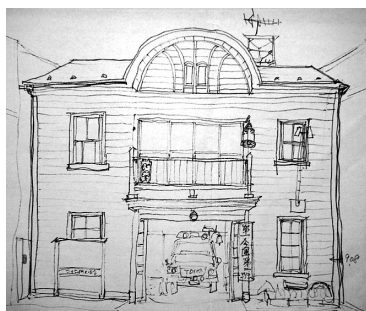
昭和15年(1940) 3月3日 竣工



二十六日町屯所*



二十六日町屯所 HPより



二十六日町屯所 調査時のスケッチ



二十六日町屯所 HP掲載時



十一日町屯所



二十八日町屯所 調査時のスケッチ



十六日町屯所



新組 三社大祭の山車

田面木屯所

昭和 27 年（1952）7 月 31 日 竣工



田面木屯所▲



田面木屯所 望楼撤去後

年代等の明らかな屯所

左比代屯所

八太郎屯所

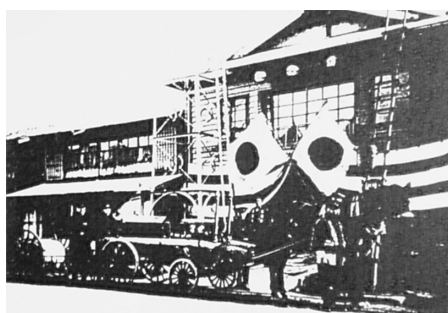
売市村消防組合屯所

館村 2 部 3 号屯所

北川村第 3 分団屯所

五戸町第 1 分団屯所

南部町剣吉の屯所



左比代屯所*



八太郎屯所*



売市村消防組合屯所▲



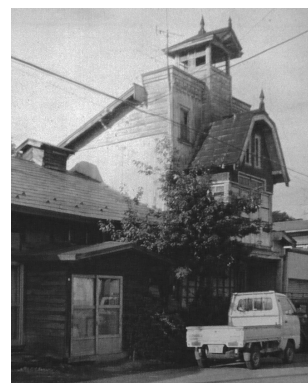
館村 2 部 3 号屯所*



北川村第 3 分団屯所
調査時スケッチ
（旧名川町虎渡）



五戸町第 1 分団屯所（大正 11 年か）



南部町剣吉の屯所

4. 屯所建築の様式的分類と特色

以上に挙げた消防屯所が何らかの資料が見つかった屯所で、その内太字の名称は当時建物が残っているか、写真があって外観について調査が出来た屯所です。外観がわかった屯所建物のデザインは様々ですがあえて分類すれば、大まかにその特徴によって3種に分けることが出来ると思います。その3種を、①エキゾティック型、②屋根上望楼（方形平面）型、③アールデコ型と名付けることにします。

① エキゾティック型

明治 42 年（1909） 二十八日町屯所 （後村）

明治 43 年（1910） 鍛冶町屯所 （青木）

大正 9 年（1920） 荒町屯所 （後村）

大正 10 年（1921） 新組屯所 （後村）

② 屋根上望楼（方形平面）型

（明治 43 年（1910） 鍛冶町屯所 [6 角]（青木））

明治 44 年（1911） 塩町屯所 （大正 13 年の大火後か）

大正 9 年（1920） 吹上屯所

大正 12 年（1923） 永福町屯所 （白石）

昭和 10 年（1935） 十六日町屯所

昭和 27 年（1952） 田面木屯所

③ アールデコ型

昭和 5 年（1930） 二十六日町屯所 （峠館）

昭和 9 年（1934） 十一日町屯所

昭和 9 年（1934） 二十八日町屯所 （ ）内は建設にあたった棟梁名

①のエキゾティック型は、外国の建築の見よう見まねでデザインしたケースで、言い伝えによれば、この分類に入る4例のうち3例の棟梁を務めた後村三郎は、シベリヤ出兵の際に彼の地で見た建築をモデルとしたということです。

この分類に入れた鍛冶町屯所は、建設にあたった棟梁は違いますが、前年に後村三郎がデザインした二十八日町屯所と帽子のような屋根の形が類似し、反りとむくりの違いはありますが、塔の部分の平面型が方形ではなく、6角或は8角であることなどからみて、建設にあたった棟梁青木元次郎が、後村三郎の二十八日町屯所のデザインの影響を受けたとみる事が出来るでしょう。

②の屋根上望楼（方形平面）型は、望楼としてはオーソドックスな姿で、主として大正13年（1924）の大火後に造られました。この形式でも、望楼の屋根正面および下の大屋根正面の破風のデザインを工夫していて、単に望楼を持つ屯所建築を造るというだけでなく、それぞれ独自性が認められます。

③のアールデコ型は、昭和の5～9年（1930～1934）に集中しています。この頃ヨーロッパ、アメリカで流行していたアールデコ様式が、日本でも建築や工芸に盛んに取り入れられました。この分類に入れた3例は、いずれも壁面に円弧を用いたデザインを施し、板張りの方向にも気を配っています。中でも二十六日町屯所では、正面の軒に半円形の破風を設けています。これらから、少々強引かもしれませんが、設計者が意図してアールデコ様式を用いたと判断しました。アールデコ様式の伝搬とい

う点からも、興味を引く作品です。

なお、この3例は屋根の上の望楼がないことも、特徴です。ただ、二十六日町の屯所には、屋根の上に望楼をあげた写真が2枚みつかりました。『八戸市消防団史』に載っている写真（5頁上）と「はじめに」で紹介したHP上の写真です。これらの写真でも向かって右前に木製の三角断面の望楼が写っています。（その後鉄製の望楼が裏に立ちました。）5頁上の写真をよく見ると、望楼は屋根の正面についている大きな半円形破風の中心よりやや右寄りに載っています。このようにほんの少し中心をはずしてデザインすることは、常識では考えられません。また、両写真ともに、現在も屋根に残っている、正面中央の半円形の軒飾りから奥に向かう円筒形の屋根の側面が写っていません。その上、HPの写真は空と軒から上を明らかに修正していて、特に屯所の手前の側面と屋根が大変不自然です。以上のことから、これらの写真は、何らかの意図を持って合成して作られた写真ではないかと考えました。この建物は現存しているはずですから、望楼が載っていたとすれば、屋根の小屋組み構造を調べれば、明らかになるはずです。それにしても、屋根の上の望楼以外は二十六日町屯所の建築にそっくりです。いずれにしても、これらの写真については、元の写真を探して、詮索する必要があります。

5. 屯所建築の近代化遺産としての意義

消防の技術は、明治維新以後近代工業の発展によって、目覚ましく変化した分野です。

八戸では、はじめに挙げたように、明治12年（1879）に腕用ポンプ、同24年（1891）に大型腕用ポンプ、明治44年（1911）に蒸気ポンプ、大正15年（1926）に手輓ガソリンポンプへと変化し、昭和6年（1931）に初めて自動車ポンプ（消防自動車）が導入されています。

竜吐水から腕用ポンプへの変化はそれほど大きな変化ではなかったと思いますが、大型腕用ポンプへの変化は器具の大型化だけでなく、運搬手段にも馬で牽くという変化をもたらしたはずです。

蒸気ポンプになれば、さらに燃料などの備蓄も必要だったでしょう。消防自動車が使われることになって、入口を左右だけでなく、上方にも大きく拡げることが必要になり、遂には木製の扉がステールのシャッターに変わるようになりました。

火災を見つけるために必要だった望楼は、周囲の建物が高層になるに従って屋根の上の望楼では間に合わなくなり、独立した櫓を立てることになりました。現在では、電話の発達から、どこからでも消防署に通報出来るようになり、火災報知機の設置が住宅でも義務付けられて、望楼の機能は全くなくなっています。その間に、屋根の上にあった望楼が、老朽化を理由に危険とみなされて、撤去するようにと指導されたということです。その様な経過を経て、近年造られた屯所の建築は、単なる消防器具置き場となっています。

同じような現象は八戸だけのことではありませんが、八戸のように消防屯所の建築を町ごとに競った街はありません。その理由には、八戸の消防組が公的な組織でなく、町ごとの町の消防組であったことと、三社大祭の山車を町ごとに競うという背景が考えられると思います。毎年の大祭に趣向を凝らした山車は、規模だけでなくメカニズムにも工夫を凝らして競うようになっていて、その熱意は尋常ではありません。

今となっては残っている屯所の数も少なくなり、特に変わったデザインの屯所もほとんどなくなっていますが、八戸の消防屯所の建物は、八戸の文化遺産であるだけでなく、日本の近代化遺産としての意義から言っても、貴重な建築であったと言えると考えています。

註

- 1) 昭和女子大学平成3年度卒業論文「八戸の消防屯所」生活美学科 森田実保子
- 2) 八戸地域広域市町村圏事務組合消防本部編『八戸市消防団史』平成2年
- 3) インターネット 管理者 かず（八戸市消防団 第一分団二班 団員経験者）（アクセス日 2011年8月1日）

「八戸市消防団第一分団二班旧二番組を紹介・応援する私的ホームページです。

廿六日町消防団の屯所を観光資源に！

八戸市消防団第一分団二班 廿六日町屯所は大正13年5月16日未明に本鍛冶町より発生した火災、所謂「八戸大火」によって消失した屯所に替わり、昭和5年5月に棟梁 峠館由太郎によって間口5間 奥行7間の現屯所が新築されました。（八戸市消防団史参照）

このページをごらんの方は、当班屯所が、八戸100景のなかの1つに選定されていることをご存知でしょうか？

たくさんある景観の中で広く市民に「よい景観」として、当班の屯所が認識されていることの現れであると実感します。

青森テレビの番組でも紹介されました。新幹線がきたということで、今いちど市内の観光名所、歴史的なスポットとしての屯所を考えたときに、はたしてこのままでいいのであろうかと思うのです。

最近では八戸市政80周年記念の小林伸一郎氏の写真集にも掲載されたり、さまざまな雑誌やメディアで紹介されました。

100景に選ばれたほどのこの屯所、外壁は薄汚れ、裏の外壁も、長い年月で風雨にさらされて反り返り、中にははがれてしまい、建築当時の土壁が見えているところもあります。いままで「そこにあって当たり前」と思い続けてきたわれわれ団員も問題であると思います。

現況のままではいずれ取り壊されてしまいます。屯所は市の持ち物です。維持できなくなったりすれば取り壊して新しいのを立てればと言う方もいると思いますが、この建物に関しては別であると思います。

今後は地元町内会・廿六日町消防団、関係機関等連携して保存、観光資源、防災の拠点として活用の道が開けることに期待します。

2002年11/10 追記 旧正田邸の問題を見て… 文化財指定は難しそうです。補修、増築などを施しているためだそうで、当班の屯所も同様の理由で難しいかもしれません。何とかいい方法はないのでしょうか…

2003年5/21 追記 黒石市消防団 第二分団第二消防部の屯所が、文化財的な価値、地域おこし資源としての存在意義が改めて見直され、市文化財の指定を受けるため当時の写真を元に、サッシなどに入れ替えられた扉、窓を元の木製を復元し入れ替えたとの事です。

ということは、当班の屯所には火の見櫓は建設当時はなかったと私は推測しているが、外側だけでも往時の姿を復元させられれば、文化財指定も可能であるということでもあります。

財源は新市町村振興宝くじ交付金事業を活用、費用は約三百十五万円だそうです。」（一部の文字を修正）

この小稿で取り上げた八戸市およびその隣接地域に建てられた消防屯所を再訪したいと思っています。なお、八戸市およびその隣接地域だけでなく、東日本大震災の被災地の方々にお見舞いを申し上げます。

（ひらい きよし 国際文化研究所特任教授・近代文化研究所所員特任教授）